立教大学共生社会研究センターニューズレター　PRISM -プリズム-

PRISM

No.19　2023年7月15日
発行：立教大学共生社会研究センター
住所：〒171-8501　東京都豊島区西池袋3-34-1
TEL：03-3985-4457　　FAX：03-3985-4458
E-mail：kyousei@rikkyo.ac.jp
URL：https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/rcccs/
No.19, July 2023
Research Center for Cooperative Civil Societies, Rikkyo University

越境ゼミと高畠通敏の読書会

大門 正克（早稲田大学特任教授）

2011年度から2013年度まで、私は立教大学文学研究科修士課程で「日本史演習」を担当しました。他大学の院生や社会人の科目等履修生など、多彩な参加者がいて楽しかったこの演習は、そのときの参加者を中心にしてその後も継続することになり、読書会として毎月１回開催することになりました。この読書会はほどなく「越境ゼミ」と呼ばれ、以来10年間続いています。会場は、私が勤務していた横浜国立大学と早稲田大学を借りています。現在は、一橋大学や早稲田大学の大学院生、大学院出身者、社会人など、私を含めて７名が参加しています。

越境ゼミは、毎年テーマを決め、毎月１冊ずつテーマに関する本を読んでいきます。報告者の報告のあと、参加者全員で感想を述べ、意見交換を行い、終了後はしばしば懇親会を開きます。今までのテーマには、「個別史と全体史をどうつなぐか」「オーラル・ヒストリーを読む」「社会史を読む」「近代天皇制／天皇」「歴史を叙述するということ／自己省察の歴史をめざして」「鹿野政直の通史を読む」「見田宗介を読む」「沖縄／沖縄の歴史」があり、2022年度には、「高畠通敏の政治学」として、高畠の著作を読んできました。高畠を読んだのは、見田宗介の越境ゼミが大変に楽しかったからでした。社会学の見田に匹敵する政治学を考えたときに高畠が浮かびました。その予想通り、高畠は一年間の読書会のテーマにふさわしく、刺激に富み、楽しい読書会になりました。

「高畠通敏の政治学」で読んだ著作（一部）

高畠で読んだのは、『自由とポリティーク 社会科学の転回』（筑摩書房、1976年）、『政治の発見　市民の政治理論序説』（三一書房、1983年）、『新保守の時代はつづくのか』（三一書房、1987年）、『政治の論理と市民』（筑摩書房、1971年）、『地方の王国』（潮出版社、1986年）、『政治を読む』（潮出版社、1989年）、『生活者の政治学』（三一書房、1993年）、『現代における政治と人間　政治学講義』（岩波書店、2005年）でした。

高畠は、60年安保後と高度経済成長が進行する難しい時期に、「近代日本の「政治」観」をたどり直し、「政治の発見――近代日本の「政治」観」（1965年）という印象的なタイトルの論文を書き上げ、自らの進むべき道を創り出します。そして、何回読んでもわくわくする「運動の政治学・ノート」（1973年）、「運動の政治学」（1977年）を提示し、政治学の課題を「運動」や「身体」にまで一挙に広げ、「自由とポリティーク」という主題を示します。「声なき声の会」での実践と重なり、高畠の足跡をたどった1年は大変に楽しく、越境ゼミにふさわしいものでした。

越境ゼミを10年間続けることができた原動力は、読書会という形式にあると思っています。本を毎月１冊ずつ読み、１年間の最後にみんなで感想を報告するスタイルには、本を読む醍醐味が含まれています。越境ゼミが10年間続いた秘密は、読むことの楽しさにあると思っています。

高畠を読んだ最後に越境ゼミの出発点である立教大学にみんなで出かけ、共生社会研究センターで高畠の資料にふれ、池袋で懇親会を開くことができたのも、楽しい思い出になりました。

越境ゼミのみなさんを迎えて

李 英美（立教大学共生社会研究センター研究員）

私が立教大学共生社会研究センターのリサーチ・アシスタントとして、はじめて資料整理に関わったのが高畠通敏資料(以下、高畠資料)でした。高畠さんの研究者としての業績や市民活動家としての姿を詳しく知らないまま、手探りで資料の整理に関わったことを覚えています。資料が公開された後、高畠資料を閲覧しにセンターを訪問する方々は居ましたが、今回のように、1年にわたって高畠さんの論考を読み合ってきたゼミのグループでの閲覧者を迎えることは、私にとってはじめての経験でした。

２つの部屋に分かれて資料ごとに数名で閲覧しましたが、高畠さんの市民運動との関わり方、交友関係や人物像に至るまで、閲覧者自身の関心に沿って資料を読み、疑問を話し合われていました。そうした所感を率直に共有することができる場に立ち会えて、資料整理者としても嬉しく思いました。また、やはり一人で黙々と資料を読むことでは生まれにくい、資料を通じたコミュニケーションだなとしみじみ思いました（とっても楽しそうでした！）。今回、越境ゼミのみなさんの訪問をつうじて、今後も多くの方々に高畠資料を活用していただけたらと思いました。

立教大学共生社会研究センター訪問（2023年2月22日）

川上 幸子（立教大学文学部史学科卒業生）

2022年度の越境ゼミでは、高畠通敏の著作を一年間講読、議論を重ねて来ました。その最後に、いつもの夜の研究室を飛び出し、長年高畠通敏が研究の場として、また教鞭を取り、多くの学生と時間を共にした立教大学を訪問することになりました。

私が大学四年間を過ごした立教大学キャンパスは、当時と比べると高層の建物が増えましたが、共生社会研究センターは、当時のままの赤レンガ造りの建物の一角にあります。アーキビストの平野さんより、センターの概要、日々センターで行われている実務の流れ、高畠通敏資料についての説明を受け書庫に入ります。書庫には、センターが受け入れてきた資料が市民運動・活動別、また個人にかかわる資料別に整理され整然と並べられているもの、これからの整理を待って積み上げられている資料等々。深く広く薄暗い？一人で入ったら迷子になりそうな空間。書庫に初めて入った私は、ここに積み上げられている資料がここに収まるまでにかかわった人々の思い、それを後世へ伝えていくことの意味を深く感じる時間となりました。

左から時計回りに須田、川上、樋浦、大門、李、高田、水野、西山

訪問の目的である高畠資料の閲覧は、研究ノート、講義資料、コメントを記した新聞の切り抜き、また高畠が運動に深くかかわっていた当時の日常の様子の写真など。この一年間読んできた著作の活字になる前の資料を実際に目にしたことは、普段研究の場にいない私には新鮮な経験であり、著者を身近に感じる時間ともなったような気がします。また、一つの資料を囲んで感想や疑問を自由に言い交しながらの時間は、通常のゼミとは違った一体感の中であっという間に時間が過ぎ、少し心残りを感じながらセンターを後にしました。

さまざまな「現場」の記録とその間

須田 佳実（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）

高畠通敏資料の配架状況

今回の訪問で閲覧した高畠通敏資料は、①市民運動に関する記録、②調査地でのフィールドワークの記録、そして③大学・教育の記録という三つに整理できます。一つ目は、「声なき声の会」の活動をまとめたスクラップブックや写真資料などです。そこには、高畠さんが他の人びとと共にデモに出たり、事務的な作業を行う姿がありました。二つ目は、『地方の王国』（潮出版社、1986年）に結集されたような、1960年代から始まったという農村でのフィールドワーク・ノートです。三つ目は、学生時代の講義ノート、また大学教員としての講義レジュメなどです。

一つ目の記録が、市民運動という「現場」にこだわり、「身体を動かす」ことから政治学における「運動」を捉えかえした高畠政治学の根幹をあらわす記録であるとしたら、二つ目・三つ目の記録は、枝葉的な「現場」の記録になるのかもしれません。講読の間はそのように思い、それぞれのつながりを意識していませんでした。しかし今回、三つの「現場」の記録を一度に閲覧してみると、複数の「現場」に足を運び、戻ることを繰り返した高畠さんの姿が浮かんでくるようでした。高畠さんはそれぞれの「現場」を往還するなかで議論を深めており、そのことも豊かな運動論の背景にあるように思いました。

資料から浮かび上がる高畠通敏氏の等身大の姿

高田 雅士（駒澤大学総合教育研究部日本文化部門専任講師）

まず、私たちが目を奪われたのは、高畠氏の当時の姿を写した貴重な写真の数々です。氏が実際に運動をおこなっていた姿を記録した写真は、私たちが氏の文献を読み進めていく際の理解や想像力を豊かにしてくれる貴重な資料でもあります。仲間たちと共に機関紙の発送をしている様子や、デモに参加している時の高畠氏の表情を見ると、なぜ彼が「からだを運び動かして訴えること」（『自由とポリティーク』筑摩書房、1976年）というように運動を定義することになったのかが理解できるような気がします。

「声なき声のたより」発送作業（1960年7月17日）成谷茂氏撮影

また、高畠氏の著作や論文、記事などを網羅的に記した「業績集」も大変貴重な資料であると感じました。現在、高畠氏の業績を全て記録した業績一覧は公に刊行されていないこともあり、この「業績集」をもとにそうした一覧が作成・公開されれば、高畠政治学をめぐる研究に大きく貢献するものと思われます。

そして最後に、高畠通敏資料を共生社会研究センターが所蔵しているということ自体に大変重要な意義があるのだとあらためて認識することとなりました。市民による社会活動関係の資料を幅広く所蔵しているセンターであるからこそ、そうしたさまざまな資料（たとえばベ平連関係の資料など）と高畠資料を組み合わせて読解していくことを可能にし、そのことは高畠政治学への私たちの理解をより深めることを手助けしてくれるのではないかと思いました。

資料の全体を見渡すこと

樋浦 豪彦（早稲田大学大学院教育学研究科修士課程）

私は今回の訪問で、はじめて資料庫の中に入るという経験を得ました。もともと高畠の資料のみを見るのだと思っていたのですが、様々な社会運動に関する史料を書庫の入口から端まで適宜解説していただき、とても興味深く幅の広い資料を収蔵しているのだと感嘆しました。

また、今回の訪問において、前述のごとく大量の生の資料を前にして、歴史を研究する自分自身にとって発見がありました。それまで自分の研究において資料を用いるときは何かを明らかにしようという目的でもって、つまり資料を押しなべて史料として研究の素材的に用いようとしてしまっていました。しかし、共生研での資料閲覧では自分自身の問題関心に縛られず、むしろ資料の側から様々に問題関心を投げかけてくるように感じたのです。高畠の講義ノートやスクラップブック、写真などを、何かを探すようにしてではなく、ただそれらをめくっていると、高畠の思いや考え、「声なき声の会」当時の状況がありありと浮かんでくるようで、それを一緒に訪問したゼミの皆さんと共有できたことはとても有意義な体験でした。

書庫案内の様子

高畠通敏の初学転向論と組み合って

水野 圭吾（早稲田大学大学院教育学研究科修士課程）

越境ゼミで私は、高畠にとって初論集にあたる『政治の論理と市民』（筑摩書房，1971年）の報告を担当しました。同著作は高畠の研究の出発点となる転向論（佐野学に代表される一国社会主義者、風早八十二・大河内一男らが唱えた生産力理論の分析を中心とする）に重きを置いた構成になっています。報告としては、転向論が難解で読み解くことが出来ず、物足りない内容となってしまいました。一方、報告を準備しているなかで、転向論を今の私とそれほど年齢が変わらない高畠が執筆していることに気づき、驚愕すると同時に報告に一層気持ちが入りました。

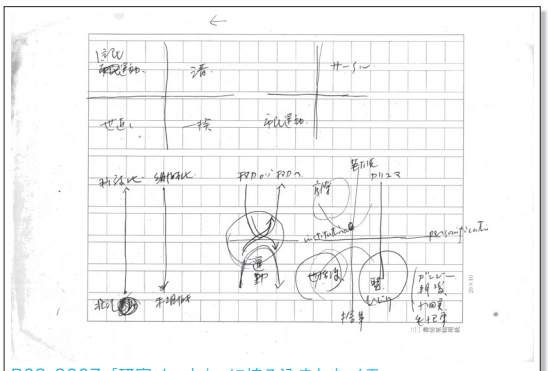
この度の訪問で、高畠資料に触れたなかで、とくに高畠自筆の学生時代の講義ノートが気になりました。ノートには転向論について書かれている箇所があり、これを手がかりに出来たらまた違った報告ができたかもしれないと思ったからです。またほかにも、高畠が直接携わった「現場」に関する様々な資料を閲覧することが出来ました。高畠資料以外にも、共生研には「現場」にかかわる資料が多く収蔵されています。ぜひ一度、立ち寄って〝生の〟資料を手にしてみてください。

高畠運動論の構想を読み解く手掛かり

西山 直志（学習院大学史料館客員研究員）

1960年代の高畠通敏は、立教大学法学部で政治学者として教鞭をとる一方で、安保闘争の中から生まれた「声なき声の会」など、運動の現場に身を置きながら「市民の政治学」を提起し、また従来の学問の在り方を問い直す「社会科学の転回」の必要性を説きました。1973年、40歳の高畠は『思想の科学』に「市民運動の政治学・ノート」を寄稿し、自らの参加体験を拠り所にしながら、日本の「運動」を理論的に再考しようと試みます。その成果は、1977年の論文「運動の政治学」に結実し、身体を運び動かして他者の心を動かす、人間相互の関係性・主体性が日本の運動概念の中核にあることを鮮やかに析出しました。『年報・政治学』に掲載されたこの論文は、比較的長文でありながら終始緊密な筆致が持続しており、高畠が強い熱量を込めて書いたことがうかがえます。

今回の訪問では、この論文へ至る過程で記されたと思われる「研究ノート」（R03-2007）を閲覧できました。このノートの正確な作成年代は不明ですが、「運動」をめぐる考察が多数含まれており、論文のプロットとなっている部分も見られることから、執筆過程を示すものだと思われます。例えば、様々な縦・横軸によるマトリクス図によって、運動の諸形態の整理が繰り返し試みられています（traditional—modern、公—私、官—市民、集団主義—個人主義、制度化—状況化、カリスマ—聖者、権威意識—権利意識、など）。但し、実際の論文では、ついにそうした図示による説明を行っていません。図による説明は理解しやすい一方で、生きた運動を捨象し、静態的な状態に落とし込むことになります。自らの“言葉で語る”ことが、高畠の選び取った叙述法だったのだと気づかされました。また随所で、カリスマ・英雄と対照的な「聖者（ひじり）」（特にガンジー）に注目していることも印象的でした。この点は殆んど論文内で展開されていませんが、運動論のなかにインド経験が影響していることをうかがわせるものでした。その他にも、走り書きされた字句に対する下線、丸囲み、抹消、矢印、線による接続といった痕跡から、高畠が自らの運動論を練り上げる過程の一端を垣間見ることができました。



R03-2007「研究ノート」 に挟み込まれたメモ

1980年代以降の高畠は、選挙分析や政治過程論によって豊かな社会化・生活の保守主義を問うことが多くなり、残念ながら「運動」の理論的追究は、これ以上はなされませんでした。しかし、遺されたこの研究ノートを併せて読み解くことで、珠玉の論文からより多くの学びを得ることができるように思います。

センター利用案内

★ご利用には事前予約が必要です。また、マスク着用・手指消毒など、新型コロナウイルス感染防止対策にご協力ください。

利用資格

- とくにありません。立教大学共生社会研究センター所蔵資料の利用を希望される方は、どなたでもご利用いただけます。
- 開館時間：月～金曜日（祝日をのぞく）10:00～12:00、13:00～16:00
- ただし、立教大学の一斉休業日のほか、資料整理などのため臨時に閉館する場合もあります。その場合はあらかじめセンターホームページなどでお知らせいたします。

閲覧

- 初回に簡単な利用者登録をお願いいたします。
- 資料は閉架式で、貸し出しはしておりません。
- 一部の資料については、プライバシー保護や資料保存などのため閲覧を制限する場合があります。詳しくはお問い合わせください。

【お問い合わせ・ご予約は】

立教大学共生社会研究センター
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
電話：03-3985-4457　FAX：03-3985-4458
E-mail：kyousei@rikkyo.ac.jp

【2023年度 センター組織】

運営委員会

- 和田 悠（立教大学文学部教授）センター長
- 市橋 秀夫（埼玉大学大学院人文社会科学研究科教授）副センター長
- 高木 恒一（立教大学社会学部教授）副センター長 ＊今年度研究休暇
- 石井 正子（立教大学異文化コミュニケーション学部教授）運営委員
- 小野沢 あかね（立教大学文学部教授）運営委員
- 沼尻 晃伸（立教大学文学部教授）運営委員
- 町村 敬志（東京経済大学コミュニケーション学部教授）運営委員

リサーチ・アシスタント

- 今井 麻美梨（立教大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程）
- 小松 恵（立教大学大学院社会学研究科博士後期課程）
- 安藤 直之（京都芸術大学大学院芸術研究科芸術専攻文芸領域修士課程）
- 香村 由佳（学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻博士前期課程修了）

スタッフ　平野 泉・川路 さつき

編集後記

みんなでワイワイ資料を読むのは楽しいもので、整理の現場にも同じような楽しさがあります。その一方で、「越境ゼミ」西山さんの心をつかんだ高畠通敏さんのノートのような資料に向き合うときに感じるのは、深くひとりで思考する、静かな時間の大切さです。（平野）

高畠通敏さんのノートは種類もいろいろ

グループで読むのも、また楽し

2023年6月10日：それぞれに資料と向き合う研究者の方々

今号ご執筆くださった「越境ゼミ」のみなさんのように、センターではグループでの閲覧も可能です。アーカイブズ資料を読むことは、読み手と資料の1対1の対話になりがちですが、グループで読むとまた別の楽しさもある――そのことが、「越境ゼミ」のみなさんの文章から伝わってきます。

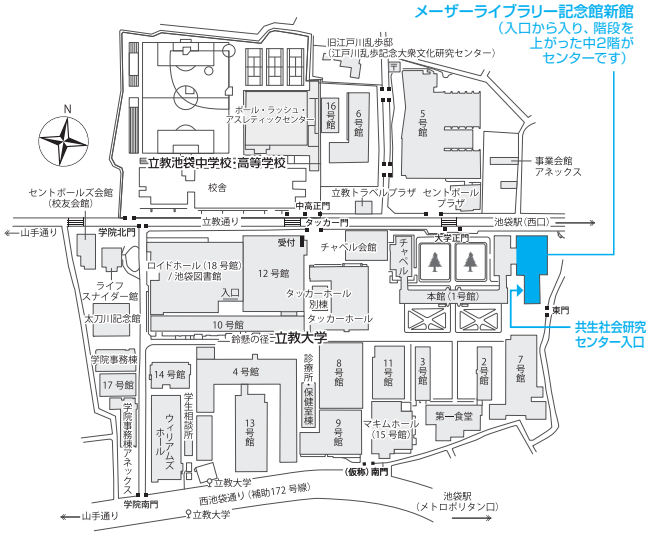
この6月にも、三里塚闘争を中心とした研究*に取り組む研究者の方が4名、調査のために来館され、たくさんの資料を閲覧されました。センターでは、三里塚闘争に関する資料は、三里塚を主な闘争の場としない様々な運動体のコレクションの中に散在しており、そのこと自体が、同時代の数々の運動にとって三里塚でのたたかいがどれほど重要なものだったかの証拠となっています。

「このビラは今まで見たことがないなあ」「こんな資料があったのか」といった発見をその場で共有し、意見交換できるのもグループ利用の醍醐味です。ご興味のある方はぜひご一報ください。

*日本学術振興会　科学研究費助成事業 基盤研究(B)「20世紀後半の社会運動の形成-展開過程の解明に向けた領域横断的な資料学的研究」（2021-2024年度、課題番号21H00569、https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-21H00569/）

【センターへのアクセス】

JR・私鉄・地下鉄各線「池袋」駅・
地下鉄「要町」駅から徒歩10～15分



PRISM — A Newsletter of Research Center for Cooperative Civil Societies — No.19, July 2023

3-34-1 Nishi-Ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo, Japan 171-8501
Tel: +81-3-3985-4457　Fax: +81-3-3985-4458
E-mail: kyousei@rikkyo.ac.jp
http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/rcccs/

立教大学
RIKKYO UNIVERSITY